特集

岐阜県関市・春日神社の能狂言面

Thematic Exhibition

The Noh and Kyōgen Masks of Kasuga Shrine in Seki

令和3（2021）年7月20日（火）～9月26日（日）
東京国立博物館 本館14室

Tokyo National Museum, Japanese Gallery, Room 14
July 20 – September 26, 2021

Seki in Gifu Prefecture was a thriving hub of swordsmiths from ancient times. Seki's Kasuga Shrine served as the tutelary shrine for these artisans. This display features Noh masks, Kyōgen masks and other masks passed down through the shrine's long history.

The masks are all masterpieces, though *Noh Mask: Jō* (*Waraijō*) is particularly worthy of note. The style of Noh masks was formalized from early modern times, with masks subsequently produced according to fixed templates. The *Waraijō* mask is different, though, with a striking originality clearly apparent in the soft lips, the vivid expressions, and the way the teeth have been carved out one by one.

岐阜県関市は、かつて多くの刀鍛冶が活躍し、現在も「刃物のまち」として知られています。大和（奈良）からこの地に移り住んだ刀鍛冶たちが、氏神として奈良の春日大社から勧請、創建したのが春日神社です。

室町時代十五世紀前半から刀鍛冶が衰退する江戸時代後期まで、春日神社では、正月二十八日に、刀鍛冶らが奉納する神事能をはじめ、さまざまな能が盛んに演じられました。刀鍛冶、領主のほか、庶民に至るまで広く能を楽しんでいたことが記録からうかがえます。

春日神社の境内には、古い形式の能舞台があり、六十件を超える能装束のほか、能面四十八面、狂言面五面、行道面・追儺面など八面の、合計六十一の仮面が伝来しています。仮面は室町時代の作を多く含む点が貴重で、平成二十二（二〇一〇）年、重要文化財に指定されました。今回はこの六十一面すべてを三期に分けて展示します。

いずれも名品ですが、最も注目すべきは「一トウ作」と銘のある「能面 尉（笑尉）」（No.3）です。近世以降の能狂言面は、様式が完成し、型を踏襲するようになります。しかし、この笑尉の一本ずつ刻んだ歯、やわらかな唇、生き生きとした表情は、定型化した能面とは一線を画するものです。創造力に満ちた造形をご覧ください。

春日神社と能

1
◎能面 翁（白色尉）
Noh Mask: *Okina* (*Hakushikijō*)
室町時代・15～16世紀
第３期展示

2
◎能面 翁（黒色尉）
Noh Mask: *Okina* (*Kokushikijō*)
室町時代・15世紀　第３期展示

春日神社には室町から安土桃山時代の貴重な能装束が多く伝わり、そのうち三十九件が一括して重要文化財に指定されています。同じく重要文化財に指定されている能狂言面、古楽面六十一件にも、近世以降の形式に則った造形でなく、創造力に富んだ、室町から安土桃山時代の作と思われるものが多く含まれます。能楽が大成した室町時代十五世紀、その中心であった大和猿楽四座の金春、宝生との繋がりを思わせる銘のある能狂言面も伝わっています。これは、関の刀鍛冶の故郷が大和であり、関で古くから能楽が盛んだったことを示しています。

春日神社の境内には、中世の絵巻などにも描かれる、鏡板や橋懸かりのない古い形式の能舞台があり、幕末頃まで刀鍛冶らによって能が奉納されていました。この神事能で使用されたのが翁面です。天下泰平、五穀豊穣を祈る翁舞で用いる神の面で、多くの面のなかでも特別な存在です。

春日神社 能舞台
画像提供：関市文化財保護センター

笑尉の作者

笑尉（No.3）面裏の「一トウ作」という刻銘は、一トウという名の面打（能面作家）の作であることを示します。従来、この一トウは、世阿弥の『申楽談儀』に登場する伝説的な面打赤鶴のことと考えられてきました。しかし、最近の研究では、赤鶴と一トウが同一人物であることが疑問視され、別人と見る説が有力です。この面の「一トウ作」という銘がいつ刻まれたのかは不明です。ただ、江戸時代に作られた面にも「一トウ」と刻むものがあり、春日神社の笑尉と同様に、面裏が滑らかに仕上げられています。これは、一トウが面の名手であり、その面裏は滑らかに仕上げられるということが、江戸時代に広く知られ、写しが作られていたことを示しています。

3
◎能面 尉（笑尉）
Noh Mask: *Jō* (*Waraijō*)
「一トウ作」陰刻　室町時代・15世紀　通期展示

面裏

左斜め

右側面

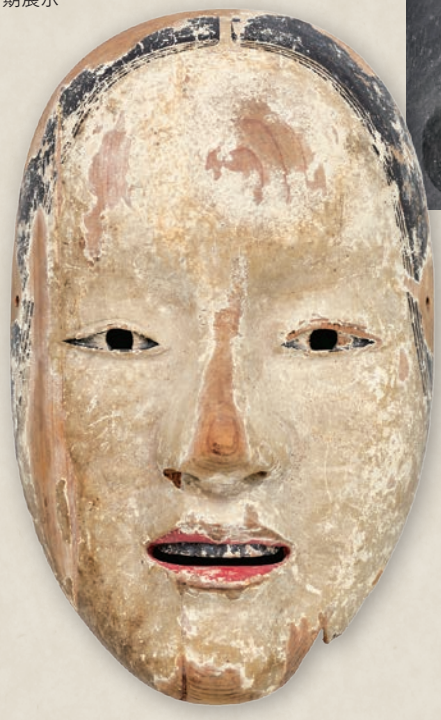
春日神社の面を作った面打

4
◎能面 霊男（りょうのおとこ）
Noh Mask: *Ryō-no-otoko*
出目満照作
「舞歌」陰刻
室町時代・16世紀
第3期展示

能面の作者名は、文字の陰刻（いんこく）や「知らせ鉋（かんな）」（面裏を削った部分に刻まれる固有の刀の跡）、焼印（やきいん）で示されることがあります。これらの銘は、後世に加えられたり写されたりすることも多いため、すべてを信じるわけにはいきませんが、よく吟味すれば、作者や制作年代を考える手掛かりになります。春日神社の面にはよく知られた面打の銘が複数見られます。

霊男（No.4）には、室町時代に活躍した面打、越前出目家（えちぜんでめけ）の初代出目満照（でめみつてる）の作と示す「舞歌」の陰刻と知らせ鉋が、女（若女、No.5）には、近江井関家（おうみいせきけ）の「イセキ◇」の陰刻が確認できます。また、霊男（怪士、No.6）には「紀太新次郎作（きたしんじろうさく）」の陰刻があり、とても薄く作られていることが特徴です。紀太新次郎の詳細は不明ですが、非常に優れた面打であることは確かです。ほかにも、面打ダンマツマの印とされる「⊙⊙」の陰刻が女（若女、No.7）に、面打角坊（すみのぼう）のものとされる「天下一若狭守（てんかいちわかさのかみ）」の焼印が女（増、No.8）に確認できます。これらは春日神社の能の隆盛を物語るだけでなく、春日神社の歴史を考えるうえでも重要な鍵になるでしょう。

5
◎能面 女（おんな）（若女（わかおんな））
Noh Mask: *Onna* (*Wakaonna*)
「イセキ◇」陰刻
室町～安土桃山時代・16世紀
第3期展示



6
◎能面 霊男（りょうのおとこ）（怪士（あやかし））
Noh Mask: *Ryō-no-otoko* (*Ayakashi*)
「紀太新次郎作」陰刻　室町時代・15～16世紀
第3期展示

造形から探る面打

春日神社の能面については、CTによる構造・木取りの把握、3D計測、蛍光エックス線による彩色等の元素分析など、科学機器を用いた調査を行なっています。まだデータを蓄積している段階ですが、調査のなかで同じ面打の作と見られる二面を見出しました。男（若男、No.9）と男（喝食、No.10）です。額が広く、紡錘形の鼻、口角の上がった口、鼻の下の窪み（人中）の形が共通します。円形の鼻孔、面裏の刳り、黄みを帯びた肌の色もよく似ています。男（No.9）に「春日」の墨書があるのみで、面打、寄進者、制作年などの情報はありませんが、個性的な特色があるので、今後の全国的な調査で同じ面打の在銘作が発見される可能性があるでしょう。

10
◎能面 男（喝食）
Noh Mask: *Otoko* (*Kasshiki*)
室町～安土桃山時代・16世紀
第3期展示

9
◎能面 男（若男）
Noh Mask: *Otoko* (*Wakaotoko*)
「春日」墨書
室町～安土桃山時代・16世紀
第1期展示

7
◎能面 女（若女）
Noh Mask: *Onna* (*Wakaonna*)
「〻」陰刻　室町～安土桃山時代・16世紀
第2期展示

8
◎能面 女（増）
Noh Mask: *Onna* (*Zō*)
「天下一若狭守」焼印、「さう」墨書
安土桃山～江戸時代・16～17世紀　第2期展示

定型化以前の能面

現在、能面は二五〇種類ほどあり、名称と形が定まっていて判別が容易です。しかし、世阿弥の『申楽談儀』には「年寄たる」尉、「顔細き」尉、「ちと年寄りしくある女」などと記されるのみで、面の名称はなく、種類も少なかったようです。室町時代末から安土桃山時代には種類が増え、名称とともに形も決まってきました。それ以前の作は、定型とは異なる表現をしています。たとえば尉（鼻瘤悪尉、No.11）は、現在の形と似ていますが、鼻の瘤が不明瞭で、額の皺が多い点が異なります。一方で、眉間のV字状の皺、両側頭部に刻む血管、長い耳は、定型に受け継がれました。鬼神（獅子口、No.12）は、頭頂に水平に黒色を引いて冠形を描き、血管を取り除けば定型になります。春日神社の能面は型を踏襲する以前の古い時代の能の様子を伝えているのです。

11
◎能面 尉（鼻瘤悪尉）
Noh Mask: *Jō* (*Hanakobu-akujō*)
室町時代・15世紀
第2〜3期展示

12
◎能面 鬼神（獅子口）
Noh Mask: *Kishin* (*Shishiguchi*)
室町時代・15世紀
第3期展示

刀鍛冶と春日神社の面

かつて関の刀鍛冶たちはその繁栄を願って、能を春日神社に奉納していました。毎年正月二十八日に関鍛冶七流の鍛冶らが、シテ、ツレ、ワキ、囃方、謡と役割を分担して演じ、善定家の惣領が翁を務めたといいます。慶安三年（一六五〇）の演能の座席図には、「忽鍛冶」の席が確認でき、こうした能の上演は幕末頃まで続いたことがわかっています。また、正月二十八日に寄進した旨の銘のある面が複数確認されます。「兼房」「房」の銘のある面は、鍛冶の惣領を担った兼房にかかわることを意味するのかもしれません。また、能の金春流や宝生流とのかかわりを示す銘のある面があることから、大和猿楽四座と刀鍛冶との繋がりも想起されるのです

13
◎能面 尉（悪尉）
Noh Mask: *Jō* (*Akujō*)
「兼房」墨書
室町時代・15〜16世紀
第1期展示

15
◎能面 怨霊（蛇）
Noh Mask: *Onryō* (*Ja*)
「宝生太夫」「ヲモテ」
「シャクツル」陰刻、
「春日」「□郎寄進」朱書
室町時代・16世紀
第1〜2期展示

14
◎能面 男（若男）
Noh Mask: *Otoko* (*Wakaotoko*)
「宝生太夫」「タツエモン」陰刻、
「春日」朱書
室町時代・15世紀
第3期展示

16
◎能面 女（小面）
Noh Mask: *Onna* (*Ko-omote*)
「小面写／永和弐年／三月日／
金春元安（花押）」墨書
室町時代・15〜16世紀
第3期展示

能面以外の面

春日神社には能面のほか、能とともに演じられる狂言で使用する狂言面、儀式で用いられる追儺面、行道面などが伝わっており、特に狂言面には素晴らしい造形のものがあります。現存する面の種類には偏りがあるため、おそらくもっと多くの面があったことが想像されます。神事能をはじめとした祭礼は、もともとは厳粛な神事ですが、一方で春日神社の能狂言を庶民も楽しんだことが知られています。儀式や祭礼も地元の人びとの信仰が作り上げた文化といえるでしょう。

17
◎古楽面 鬼神（きしん）
Kogaku Mask: *Kishin*
室町時代・15〜16世紀
第1期展示

19
◎狂言面 乙（おと）
Kyōgen Mask: *Oto*
室町時代・15〜16世紀
通期展示

18
◎狂言面 伯蔵主（はくぞうす）
Kyōgen Mask: *Hakuzōsu*
「房」針書
室町時代・15〜16世紀
第3期展示

凡例
・掲載作品は、すべて春日神社の所蔵品です。
・図版の作品データは、指定（◎は重要文化財）、名称、作者等、時代・世紀、展示期間（第1期：7月20日〜8月15日、第2期：8月17日〜9月5日、第3期：9月7日〜26日）の順に記しています。なお、展示期間は都合により変更される場合があります。

TNM
特集 岐阜県関市・春日神社の能狂言面　2021年7月20日発行
執筆：浅見龍介、川岸瀬里、翻訳：フランク・ウィットカム、撮影：吉岡由哲（以上、東京国立博物館）、デザイン・制作・印刷：精興社
編集・発行：東京国立博物館
©2021 東京国立博物館　Tokyo National Museum